＜2021 年度　第 4 回定例研究会（共催：熊本学園大学国際交流委員会／ハイブリッド開催＞

ソーシャルワークの推進におけるシミュレーションを使用した教育と実践研究

講演：朝倉　健太
（カールトン大学ソーシャルワーク学部准教授）

日　時：2021 年 12 月 7 日（火）18 時～19 時 30 分

2021 年度第 4 回研究会は、本学協定校のカナダ・カールトン大学ソーシャルワーク学部准教授の朝倉健太氏によるシミュレーション教育法に関する講演を実施した。朝倉氏は、10 代で渡米して以来、LGBTQ 問題・移民難民問題・児童福祉分野で、臨床経験を積んでこられた。今回の講演では、これらの経験をふまえ、カナダ・トロント大学で研究されてきたシミュレーション教育の研究、そしてシミュレーション法を使った実践能力の精神の研究をわかりやすく紹介していただいた。本稿はその概要である。

はじめに、講演内容の前提として、社会に抑圧や阻害される当事者のウェルビーイングの研究についてお話があった。福祉を受ける人々が「より良く生きる」ことをどう捉えるかの問題である。これをふまえ、プロの役者を模擬クライアント（ソーシャルワークを受ける人）とし、ソーシャルワーク実践者の技術、理論、省察力、価値観等をビデオやインタビューを使って観察する方法を具体的に示していただいた。この方法を用いてアクティブラーニングを行うことがシミュレーション教育であり、シミュレーション教育の有効性を実証的に裏付けることができるとのことであった。

シミュレーション教育は実習教育の変化に対応するためにはじまったが、理論と実践をつなぐ役割も担い、また社会福祉を学ぶ学生の能力を評価することも期待されている。コロナ禍においては、注目度も増しているとのことであった。

他方で、いくつかの問題も懸念されている。たとえば、プロの役者を雇う費用や担当教員にかかる負担、協力を要請する社会福祉士がベテラン実践者に集中してしまうこと、学生自身が実践者の立場でみることが難しいことである。そこで、学生同士でのロールプレイを通してシミュレーション教育をしてみたが、学生同士だと信ぴょう性が乏しくなり、シナリオを簡単にしてしまう傾向があり、建設的なフィードバックを与えがたいという問題点も明らかになった。

そこで、朝倉氏が提案するのは 5 ステップの教育である。第 1 段階は、シミュレーション教育の適切性である。シミュレーション教育が有効だといっても、どのクラスでも有効なわけではない。そこで、最も実施するのが適切なクラスを選定することが重要となる。第 2 段階は、シナリオ製作である。学習目標にリンクさせたケースでシナリオを製作するのだが、教員が知り尽くしたケースないし考え

つくしたケースのみを使うべきとした。第3段階は、協力してくれる役者のオーディションとリハーサルである。地元の劇団、医学部、看護学部に付けられたプログラムを通したオーディションとした方が良く、雇った役者に見合うようにシナリオを書き直してリハーサルをすべきとした。第4段階が学びに適したクラスの環境づくりである。最初の段階から学生が不安に思うこともある。そのため、学生の不安感を払拭する配慮が必要となる。第5段階は、熟議とフィードバックである。学生に対し学習目標に沿った建設的なフィードバックをすることはもちろん、観察、見学による学びにも注目し、観察している学生にも対応する。さらに、協力してくれた役者からのフィードバックも受けることも必要とした。この朝倉氏の提案を文末に表でまとめて示した。

最後に、コロナ禍において、オンライン上でのシミュレーション教育の実践が可能であることを提示していただき、報告を終えた。

（研究会報告担当者：向井洋子）

＜参考＞

朝倉氏が提唱するシミュレーション教育の5ステップ

1	シミュレーション教育の適切性	・そのクラスに適切か ・学習ゴールを念頭に置く必要性 ・カリキュラム上の足場設定 ・いつシミュレーション教育を実施するか ・どういったシミュレーションを使うか （＋頻度、理由）
2	シナリオ製作	・ケースシナリオを学習目標にリンクさせる ・学生に練習してもらうスキルを学習目標に沿って決める ・教員が知り尽くしたケースないし考えつくしたケースのみを使う ・ステレオタイプや文化盗用にならないよう、特定のコミュニティや現場ワーカーに相談する
3	役者のオーディションとリハーサル	・劇団、医学部、看護学部に付けられたプログラムを通したオーディションとする ・雇った役者に見合うようにシナリオを書き直してリハーサルをする
4	学びに適したクラスの環境づくり	・学生の不安感を最初の段階から気を付ける必要性 ・少しくらいの不快感はあった方が良い ・ほかの学生のシミュレーションを観察することでも学びはある
5	熟議とフィードバック	・各学生に対し学習目標に沿った建設的なフィードバックをする ・観察、見学による学びにも注目し、観察している学生にも対応する ・特別なトレーニングを受けた役者からのフィードバックも受けることの必要性